

エキセントリシティ

eccentricity 【éksəntrísəti, -sen-】

1 [U] (言動・性格・服装などの) 異常、風変わり (なこと) ≪in, of≫。異常さ、変わり具合

1 a [C] (しばしば-ties) 常軌を逸した行為、奇行、奇癖

2 [C] ≪機械≫ 偏心 (距離)。≪数学≫ 離心率

(プログレッシブ英和中辞典 第五版)

1

「てかさー、堅書君……だっけ？ あいつ何なの？ 超付き合い悪くない？」
「私も思った！ せっかく同じグループになって、こっちが挨拶してんのにさ。飲み会に

も来ないし。最悪」

女子二人がハイボール片手に欠席裁判で盛り上がってるのを、冷めたポテトフライをつまみながらあたしはぼんやりと眺めている。ハデ目のメイクの子と小動物系の子。心の中で勝手にハデ子と小動物ちゃんって呼んでる。こいつら結構口が悪いなー。まあ変に善人ぶるよりはいいけどさ。

「ま、まあ、バイトとかかもしれないねえしき。明日、今日の課題、一緒にやろうって誘ってみようぜ」

「だよな、今日もちょっと急だったし……。僕、一回生のときからあいつと実験一緒だったけど、悪いやつじゃないよ。コミュ障だけ」

変なTシャツの男子と眼鏡の男子はヒートアップする女子組をなだめようと必死だ。このまま女子が結束しちゃって、女子と男子が断絶しちゃうのを恐れてるんだろうな。でも変T君も眼鏡君も、完全にハデ子と小動物ちゃんに気圧けおされてる。

あたし？ あたしは別にどっちにつこうとも思わない。ま、揉めたりしないで楽しくやればいっかなーって思ってる。

河原町かわらまちの大衆居酒屋。三回生前期の演習は六人のグループ単位で課題をやることになっていて、今日はグループ結成記念の飲み会だった。

厳正なる抽選の結果、うちのグループはちょうど男女三人ずつという工学部にしては奇跡的な構成になって、合コンかよとかイカサマじゃねって怨恨のこもった視線が男子率100%のグループから飛んできてたけど、今夜のこの飲み会は男子一人が欠席したことで、結果としてさらに超レアな力場が作り出されていた。

その欠席者が、今このテーブルでもっぱら話題の堅書君だ。学科の中でも印象が薄くて、そういやいたなあって感じのやつ。たぶんこれまであたしはしゃべったことなかったと思う。グループ分けが終わって、親睦会を兼ねて飲みにも行こうかってみんなで盛り上がった中で、堅書君は荷物をまとめてそそくさと帰ろうとした。眼鏡君が「飲み会、行かないの？」って声をかけたら、「あつ、その、そういうの僕ちよつと……すいません……」とかなんとかモゴモゴ言いながらスーッと消えてった。そりゃ、心証悪くするわ。あたしだってさすがにちよつとイラツとした。

でも、まあ、このまま悪口大会になるのもなんかイヤだった。せつかくのお酒が不味くなる。

「へえ、堅書君と実験一緒だったんだ！　じゃあ慣れてるよね。よし、今後の対応任せた！　……あ、レモンサワーこっちでーす！」

やっと運ばれてきたサワーとレモン絞り器を受け取りながら、あたしは話をちよつとで

もポジティブな方向に持って行こうとする。

「うん。ちょっと人見知りっぽいところあるけど、話すと普通にいいやつだし、レポートとかも見せてくれてめっちゃ助かったわ。……あ、でも」

眼鏡君はちょっと言いよんどんで、ビールを一口あおった。

「昔はもっと人付き合い良かったかも。学科の飲み会とかにも出てたし、なんだろうな、もうちょっと人生楽しそうだったっていうか」

全力でレモンを搾っていたあたしの手が思わず止まる。

「え、なにそれどゆこと？」

「んー、なんかあいつ、最近ちょっと変わったんだよね。前はもっと普通だった」

さっきまでボロクソ言ってた女子組も驚いた顔をしてる。

「やっぱ今は普通じゃないってこと？　てか、昔は飲み会出てたんだ？　それってなんか

余計ムカつかない？」

ああもう、またそっち方向に話戻さないでよ、とハデ子に内心うんざりしていると、

「俺の見立てによるとだな……それはずばり、彼女に振られたんだな！」

と斜め横から断言調で迷推理が飛んできた。変T。なんでうれしそうなのこいつ。

「えー、彼女以前の段階なんじゃない？　告って玉砕した的な？」

「絶対それだよ！ 彼女いない歴イコール年齢ってやつ！」とケラケラ笑う女子たち。だけど、それを眼鏡君は即座に否定した。

「や、堅書は彼女いたよ」

瞬間、みんなの笑い声が止まった。眼鏡君は淡々と真顔で、でも自信ありげに続けた。「ていうか、いる。たぶん今でも普通につきあっているとと思う」

2

「え？ 堅書君て彼女いるんだ!? まさかの展開！ 面白すぎ！」

「マジかよ……堅書でさえ彼女がいるのに、俺ときたら……」

再び大爆笑する女子二人とうなだれる男子一人を無視して、

「えマジで？ それってどんな人？」

とあたしはやや食い気味に尋ねる。あんな協調性ゼロ、コミュ障の塊みたいな人間に彼女さんがいるなんて意外だった。

「僕も会ったことはないけど……。だいぶ前だけど写真見せてもらったら普通に美人だっ

た。なんかハーフツインテール？　ていうのかな？　髪が」眼鏡君は両耳の上あたりに手
をやって、髪を軽く束ねるような仕草をしてみせる。

「え、ヤツバ！　何それ二次元？　あ、Vカノ？」

「いや、普通にリアル。京斗大生^{けいと}って言ってた。学部は違うっぽい」

「マジかー。てか、うちの大学でハーフツインて何者!？」

「あ、あと高一からずっとつきあってるって言ってるってびびった」

「高一！　足かけ六年じゃん！　すご！　すごすぎなんだけど！」

昼に会った堅書君とのギャップがすごすぎて、イメージが音を立てて崩れていく。

「テンションたっか」

「ハーフツインのリアル彼女だとお……くそつ、あいつ、前世でどんな善行を積んだって
んだよ……!」

「あんたVカノと添い遂げるんじゃないかったつけ」

へえ、あの堅書君も普通に彼女さんの話なんてするんだ。というか昔は確かに普通の人
だったのかもしれない。それが、何かをきっかけにして変わっちゃったのかな？　それこ
そ、最近になってその彼女さんに振られたとか。

「ていうかさ、ほんとに今でもつきあってるのかな？　急に振られて落ち込みまくってん

のかもよ？」と直球で尋ねてみる。

「少なくとも先月の時点では、週一で会ってるとは言ってた」

「そっか。てか結構堅書君としゃべってんだね」

「うん。あいつ話振ると結構しゃべるよ。……それに、堅書が何かおかしくなったのって、二回生の後期くらいからなんだ。でも彼女とは今でも普通に続いてるっぽい。だから、なんともなくだけど、彼女は関係ないんだと思う」

五人とも黙ってしまった。

「まあ、倦怠期とかかもしれないよね。そんだけ長くつきあっているとさ——」

絞りきったレモン汁をサワーのグラスに注いで、あたしは分かったような口をきく。それにしても、二回生の後期って、何かあったつけ。全然心当たりがない。

小動物ちゃんがカルーアミルクをマドラーでくるくるかき混ぜながら、

「おかしくなったって、具体的にどう変わったんだろ？ メンタルとかだとちょっと心配だよね……」

と不安げな声で言う。さっきまで本人が聞いたらメンタルやられそうな発言連発してたのあんたでしょ、とあたしは心の中でそっと突っ込みを入れる。

「あ、いや、あいつ、別に病んでるとかは無いと思うよ。おかしくなったってのはちよっ

と言い過ぎだったかも。悪かった」

眼鏡君があわてて言い直す。

「そうだな、ええと、おかしくなったんじゃないかって……うーん、なんだろうな、余裕がなくなっただっていうのかな。必死感っていうか。受験生の十二月みたいな感じ？」

「ああ……」

大学受験は一応あたしたちの共通体験だったから、眼鏡君のその一言でみんな妙に納得した。そっか、ああいう心理状態か。でもなんでだろう？　まさかここまで来て仮面浪人なわけないし。

「なんだろ、就活？」

「えー、うちらも今年の夏はインターンやるけどさ。就活ならむしろもっとコミュニケーション上げろよって思わない？」

「だよなー。私達だってバイトで忙しい中で、ちゃんと演習やってきたいからこういう会を設けてんのにさ」

「俺は大学院考えてるけど、院試なんてまだ一年以上あるしな。いや、むしろ今年が遊ぶ最後のチャンスなんだよな……。人生最後の夏休みか……。くっ……」

またもや謎にくずおれている変Tの横でぼそっと眼鏡君が放った一言が、今日の飲み会

で一番のハイライトだったかもしれない。

「なんか堅書ってさ、もう研究室に入ってたよね」

「ええー!?」

「マジ？」

「はあ？　なんで!?」

「ちょ、研究室配属って四回生からじゃないの？」

うちの学部は四回生になると研究室に配属されて、一年かけて卒業論文を書くことになっている。多くの研究室はあたしたちが今通っている吉田キャンパスよしだから遠く離れた桂キャンパスかつらにあって、四回生と院生、教職員しかいない陸の孤島は、毎日がお祭りみたいな吉田とはあまりに別世界っていう印象があった。

「じゃあ堅書君って、桂に通ってるってこと？」

「そうらしい。あいつ講義終わるといつも桂バスで速攻あっちに帰るんだよ」
だから、演習のあとすぐに消えてたのか。

「てことは、家も桂？」

「うん、元々実家住みだったらいいんだけど、なんか最近一人暮らし始めたって」

「氣イ早すぎ！　私なんかむしろ一秒でも長く吉田にとどまりたいんだけど」

それはあたしも同感だった。来年四月から“島流し”にあうことを考えると、正直ちよつと憂鬱だった。

「だいたい、三回生で研究室って、制度的にアリなの？」

「どうなんだろう。正式な配属じゃなくて、ただ出入りさせてもらってただけなんじゃない？」

「かもしれない。千古研らしいんだけど、あの先生よく『気軽に遊びにおいで』って言うてるし」

「あー、それめっちゃ言うてそう」

千古先生は、奇人変人が多いうちの学科の先生の中でもとびきり変わってて、講義も正直カオスすぎて何言ってるのかわかんなかったけど、とにかく楽しそうにやりたい放題やってる印象があった。もっとも、本人は普段はあまり桂にも吉田にも吉田にもいないらしくて、御所の近くにメインオフィスがあるのだと言っていた。

「いや、でもさ、遊びに行ってるってレベルじゃない？ 引っ越しまでしてんしょ？」

「やっぱ堅書、あいつおかしいわ。普通じゃねーわ。大丈夫なのかよ……」

「私は千古研って聞いてなんか納得。あの研究室にはマッドな人間が吸い寄せられる何か

があるんだろうねー」

結局、堅書君はやっぱり変だという結論で全会一致して、グループの結束が高まった気がした。険悪な雰囲気もいつの間にか消えていた。

教室の堅書君の、どこか思い詰めたような横顔をうつすら思い出す。

「マジで、堅書君って何考えてんだろうね？ ま、うちら凡人にはわかんないんだろうけどさー」

変人の考えていることはわからない。それが今日の飲み会の結論だ。あたしは大皿に最後まで残っていた「遠慮のかたまり」に遠慮なく箸をのばした。

3

話をしてみると、確かに堅書君は思ったほど取っつきにくいヤツじゃなかった。口数は少ないし、ちょっとキョドってるけど、最低限の世間話くらいには乗ってくれる。ただ、いつまでも「ですます」口調を崩さないのがハデ子がキレて「ですます禁止！ 使ったら罰金五百円ね！」と宣言してからは、グループ内ではタメ口で話してくれるようになって、

ちよつとは馴染んできたかなと思う。あたしは別に、ですまでも気にしないけどね。

堅書君の彼女さんの話は、あの飲み会の翌日にすっかりイジられた。

「堅書い、お前さ、何抜け駆けして彼女作ってんだよ！俺にも写真見せてくれよお！」

変Tは今日もまた別の変なTシャツを着ている。抜け駆けも何も、変Tと出会う三年も前から堅書君は彼女さんとききあっているんだから、言いがかりつてレベルを超えている。特大の理不尽をぶつけられて怪訝な顔をしている堅書君に、眼鏡君がバツの悪そうな顔で、

「ごめん、昨日の飲み会で堅書の彼女の話になってさ」

とフオーする。ハデ子と小動物ちゃんも「堅書君の彼女？ 見たい見たーい！」と寄ってくる。

「え、あ、その……」

詰め寄られて堅書君も観念したのか、渋々スマホに一枚の写真を表示させた。場所は鴨川の河川敷だろうか。意外にも露出度の高い服を着た長髪の女性が立っている。かなり大胆なシヨルダーカットにぴっちりしたシヨートパンツ。しかも服の中央にスリットがあつて、おへそが丸見えになっている。ちよつとすごいな。こういうのが堅書君の趣味なんだろうか。

……が。

肝心の顔が、よく見えない。かなり引きで撮られてて、ポートレートというより風景写真の中にたまたま人が映り込んでいる、って感じ。しかも彼女さんもちょっと顔をそむけ気味だ。髪もハーフツインなのかただのロングなのかよくわからない。スタイルもいいし、美人っぽいことは何となくわかるけど、たぶん街で会っても気づかないなこれ。

「これじゃ、顔わかんなくない？ もっとアップの写真ないわけ？」

「堅書君さあ、わざと解像度低い写真出してきたでしょ！ にしても服やバいいねー」

「おおお、俺には見えるぞ！ ハーフツインの美少女が恥じらっている姿が！ 泣きぼくろが神々しい！」

変T、どういう目をしてんの。そもそもこの写真のどこにそんな情報量が含まれてるのか。

これ以上の写真が出てこないようなので、あたしは質問タイムを開始する。

「これが堅書君の彼女さんかー。マジエグいねー。何学部？」

一瞬、間があった。

「え……。そ、総^そ合^う人^じ間^ん学部……」

「総人！ 総人ねー。あー、うん、なるほどー……」

工学部のあたしにとって、文系とも理系ともつかない謎の学部なので、話をどう続けたらいいかわからない。

「じゃあさ、高校の時って、どういうきっかけで知り合ったの？」

「えっと……。図書委員で、一緒だったんだ」

「へえ、堅書君って図書委員だったんだ！　いかにもやってそう。休み時間とかいっつも難しそうな本読んでるもんね」

「あ、ああ……」

彼女さんの話をする堅書君は心なしか顔が赤くなってるようにも見える。でも、照れてるのか、怒ってるのか、戸惑ってるのか、よくわからない。

「総人ってこっから近いし、大学内でしょっちゅう会えるじゃん。いいなー。ねえ、今日も会ったりした？」

そう言う小動物ちゃんは遠恋中なので、心底うらやましそうだ。

「いや……しばらく会ってない」

「しばらくって……どのくらい？」

「ええと……四週間、いや五週間、かな……」

場の空気が変わった。

「はあ？」

「なんで!？」

「すぐそこでしょ！　なんで会わないの！」

「それ、やばくね？　俺でもわかるわ」

「堅書さ、週一で会ってるって言ってなかったっけ」

「ああ……あの頃はそうしてたんだけど、最近忙しくて」

「……W i z は？　最近送ってる？」

「送ってない……」

「やばいって。それマジで自然消滅コースだって」

「いやー、彼女のほうも放置してんなら、もう手遅れなんじゃない？」

こりゃだめだ、と思った。六年間も続いてきたことが奇跡かもしれない。というかもしれない。もうとつくに終わりを迎えてるのかも知れなかった。

一気にお通夜ムードになったところで、先生が入ってきて演習が始まってしまった。演習が終わると堅書君はいつものように秒で教室を出ていった。彼女さんに会いに行くとも思えない。いつものバスで桂キャンパスに帰ったんだろうな。

それ以来、堅書君の彼女さんの話はなんとなくタブーになってしまった。だって、怖く

て訊けないじゃん。その後どうなったの、なんてさ。

堅書君はその後もいつもと変わらずに、淡々と講義や演習をこなしては、毎日バスで桂に帰って行った。飲み会には何度誘っても来てくれなかったし、お昼ご飯もいつも何かの専門書を読みながら一人で食べていた。話を振ると一応答えてくれるけど、基本的に空き時間はいつも何かしら勉強したりコーディングしたり英語の論文を読んだりしてて、なんとなく話し掛けづらかった。しかも演習中の余った時間にも、何やら内職していた。先生やTAにもバレてみたいんだけど、課題はちゃんとこなしてるので黙認されてるっぽかった。

一度、みんなで集まって一緒に課題やろうぜって話になったことがある。確か前期の終わり頃、いつもの作業通話も何となく飽きてきたあたりだったと思う。小動物ちゃんが「どうせなら桂キャンパスに行ってみない？ そのほうが堅書君も誘いやすいし」とか言い出して、桂まで行くことになった。まあ、それはただの口実で、なんとなく夏の遠足気分でみんなとわいわいプチ遠出したかったただけだ。一応事前に、眼鏡君がWizで堅書君に連絡したんだけど、全然既読がつかない。いつもそうだから、多分ほんとに読んでないんだと思う。だから、実質的にアポ無し突撃するしかなかった。

変丁が誰かから聞き出してきた堅書君の下宿は桂キャンパスの真裏にあった。いかにも昭和って感じの、今にも倒れそうな安アパート。半信半疑で部屋のドアをノックするとほんとに堅書君が出てきた。だけど堅書君はあたしたちの誘いを速攻断って、部屋に引込んでしまった。しょうがなく、五人で桂キャンパスの図書館に行つてそこで課題をやったり、隣の建物の食堂で夕飯を食べてみたりしたけど、みんな口数が少なかった。四回生になつたら毎日こんな生活になるのかつてどんよりしていたのはきつと、あたしだけじゃなかったんだと思う。しかも吉田までの連絡バスが結構早い時間になくなることを誰も知らなくて、結局バスやら阪急やらを乗り継いで帰らないといけなくなつて、散々な目にあつた。

あの日、堅書君のアパートで見た海の家みたいなちっちゃい共同シャワー、玄関先で感じた扇風機の熱風、食堂で黙々と食べたチキンカツ、辺り一帯を覆う草いきれの匂い、帰りのバス停から見上げた生ぬるい月。それらは一夜の夢みたいに、あたしの記憶の中に強烈に残り続けた。まさか翌年、あの安アパートにしょっちゅう通うことになるなんて、當時は予想もしてなかった。

何しろあの頃はまだ、堅書君のところに、ヤタはいなかったからね。

4

「堅書君っ。やつほ」

安アパートの廊下をギシギシ音を立てて進んでいくと、珍しく共同キッチンの前で堅書君と鉢合わせした。

「……何の用」

暑さのせいもあるのか、堅書君は少し不機嫌そうだ。ていうか、この前よりもさらにやつれてるみたいに見える。

「何の用って、ヤタのワクチン！ もう四週間経ったでしょ？ 堅書君忙しくて忘れてんじゃないかなって」

「……ああ、もう四週間か」

「ほらやつぱ忘れてる！ 堅書君、W i z も読んでくれないしさー。来ちゃった方が早い

し」

ヤタっていうのは、三月に堅書君が飼い始めた子猫だ。真っ黒で、ちっちゃくて、子猫にしてはすごくおとなしくて、それでもつてめっちゃ可愛くて、会うたんびにぐんぐん大きくなってるから会いに来るのが楽しいんだ。堅書君てば、猫の飼い方も知らないのにヤタを拾ってきて死なせかけて、たまたま忘れ物を届けに来たあたしが見つけて速攻お医者さんに連れてって、その後もつきつきりであたしと一緒に世話をしたから助かったんであって、あたしはヤタの命の恩人なのに、まるで感謝してもらえてない。その後の育て方も危なっかしいから、こうして時々様子を見に来てる。

ヤタっていう名前は堅書君がつけた。弱っていたヤタに子猫用ミルクを数時間おきに飲ませ続けて数日すると、荒れていた毛並みもすっかり良くなって、カラスの濡れ羽色っていうのかな、真っ黒で艶やかになって、「つやつつやになったね！ カラスみたい」ってあたしが言ったら堅書君が「名前決めた。ヤタにしよう」って。ヤタガラスのヤタなんだった。なんか、導きの神様なんだったって言った。

ヤタの面倒をしょっちゅう見に来てあげられるのも、四回生になってあたしも桂に引越したから。去年だったら無理ゲーだったな。あたしは堅書君とは別の研究室に入って、今は卒業研究と院試の勉強を進めてる。講義や演習はほとんどなくなって、基本的に研究

室が居場所になるから、学科のみんなでつるむ機会もすっかりなくなっちゃった。桂での学生生活は思ったほど悪くはなかったし、研究はそこそこ楽しいけど、吉田でのバカ騒ぎが時々無性に懐かしくなったりもする。

堅書君はちょうど鍋でお湯を沸かしているところだった。手にはパスタの袋を持っている。

「お、なに？ パスタ？ パスタじゃん！ ほおー、堅書君パスタ作るんだ！ いいじゃん。何味？ カルボナーラ？ ジェノベーゼ？ マンマミーア？ ランボルギーニ？」

「塩味」

「ちよつとさあ、こつちがボケてんだからツツコミくらい入れてよ！ ……って、え？ 待って、塩？ 塩って何？ ボケをボケで返す!？」

「いや、だから塩で食べ……」

「はあ!? 塩オンリー？ 素パスタ？ 素うどん的な？ 副菜もなし？」

見るとコンロの脇には確かにお皿と塩とお箸しかない。その瞬間、今日もあたしは爆発してしまう。

「何考えてんの！ どんだけ極貧生活してんの！ 死んじゃうよ！ 待ってて今パスタ

ソース買ってくるから！ 逃げないでよ！」

扇風機の回る音が部屋に響いている。堅書君は部屋の床に座って、あたしは玄関のたたきにしゃがんで、二人でパスタを食べる。トマトソースとソーセージで超適当ナポリタン。チーズ入り。他にも野菜ジュースとか、レトルトカレーとか、サバ缶とか、常温保存できて栄養がありそうな物もいろいろ買ってきた。パスタのアレンジにも使えるしね。あともちろん、ヤタのフードも。

「マジでずっと塩パスタだったの？」

「ああ。塩だけって、けっこう旨いんだ」

「そういう問題じゃないでしょ！ ……壊血病になるよ。ほら、昔、船乗りとかがなつてたやつ。堅書君が倒れたらさ、ヤタはどうなんの」

「……」

「猫を飼うってのはさ、そういうことにも責任を持つことだかんね」

「……そうだな。ありがとう」

玄関先のたたきのところが結界だ。すぐ横にヤタもいて、無心に子猫用フードを食べている。ここまではあたしも立ち入るけど、それはあくまでヤタのためだ。部屋の中には踏

み込まない。さすがに彼女持ちの男性の部屋にずかずかと上がるのはちょっと違うかなって思ってる。

というか、彼女さんと今どうなっているのかは、あれから訊けてない。ずっと気にはなってる。でも、彼女が確実にいないってのはつきりするまでは中には入らないって、自分の中で決めてるんだ。

「んー、美味しかった！ やっぱ夏はトマトしか勝たんね」

食べ終わって横を見ると、堅書君も空になったお皿を床に置いて一息ついてた。ま、洗い物くらいは自分でやってもらわないとバチが当たるよね、と思いながらお皿に目をやる。……あれ。何かが、変だ。

違和感の正体は、きれいに除けられた輪切りのピーマンだった。

「あー！ ちょっと！ 何ピーマンだけ残してんの！ お子様じゃん！」

「うっ……その……」

「食べなさい！ 全部食べないと、買ってきた物全部持って帰っちゃうかんね」

ピーマンを口に入れてすぐに水で流し込む堅書君に呆れつつも、意外な一面を見た気がして何だか笑ってしまう。

「ふふっ……あははははっ」

「お子様で悪かったな」

「ほんっとお子様だよ。ヤタもあきれてるってさ。ねえヤタ、お前のご主人様はなんでもんなお子ちゃまなんだろうねえ」

ヤタの耳の付け根をこちょこちょする。ヤタは小さく鳴いてあたしの足元にごろんと寝そべる。

「でもさ、ピーマンが苦手でも、パプリカならいけるんじゃないかな？ あれなら苦くないしさ。彩りもきれいだし」

すると堅書君が軽く鼻で笑った。

「何笑ってんの！ そこ笑うとこじゃないでしょ！」

「あ、いや、ごめん、つい最近まったく同じことを言われたから……」

「え？ 誰に？」

思わず反射的に訊いてしまった。

「う……、か……彼女に……」

あ……。

彼女さんと、ちゃんと続いていたんだ。

そっか、そうだよな。六年もつきあってるんだもんね。そう簡単には別れないよね。まったくもう、心配させないでよ。安心したけど……なんだろう、そうならそうと早く言つてよ。

「ちょっと、彼女さんにまで言われてんの!? 彼女さん、健気すぎて泣けてくるわ……。
というか彼女さんはさ、元気? ちゃんと連絡取ってんの?」

「ああ、先月久しぶりに少し会えたんだ。連絡はなかなかできてないけど」

「先月!? ダメじゃん! やっぱダメじゃん! むしろあたしのほうが会ってんじゃない。
勝ったね」

「かもしれない」

「何認めてんの! 知らないよ? このまま勝ち進んじやうよ?」

「いや……、僕だつて好きこのんで彼女を放置してるわけじゃない」

……ああ、うん、まあ、そりやそうだよな。なんだかんだいっても、彼女さんだもんね。
でも、だとしたら。だとしたらさ。

「じゃあ、なんで?」

ずっと訊きたかった、だけど心の奥底に押し込めていた問いが、ふつふつと湧き上がっ

てくる。堅書君に突きつけるなら、今しかない、と思う。この勢いで訊いちゃえ。ずっと我慢していたけど、訊けばきつと、楽になれる気がする。

「忙しい忙しいって、何がそんなに忙しいの？ 彼女さんもヤタもほったらかしにして、学科の行事や飲み会も全部すっぱかして、食事だってこんなに切り詰めて、去年から研究室に入っちゃって、休み時間もずっとベンキョしててさ」

学科のみんなやあたしも、どれだけ堅書君のこと心配してたと思ってんの。

「院試だって願書出さなかったんでしょ。あたし、てっきり千古研にそのまま進むんだと思ってた。だから猛勉強してるのかなって思ってた」

あ、ダメだ、なんか止まらなくなってる。自分の声が震えている。

「ねえ、堅書君はさ」

気がついたら立ち上がっていた。ヤタの真ん丸な目がこちらを見上げている。

「そこまで自分を追い詰めて、大学生活全部放り投げて、何をやるうとしてるの」

堅書君は一瞬ひるんだように見えたけれど、ゆっくりと口を開いた。

その返事は、全然、答えになっていなかった。

「……どうしても、会ってお礼を言いたい人がいるんだ」

話がまるで見えない。

「え……。どういうこと。それって誰」

バカみたいな返事しかできない。頭の回転が速すぎる人ってロジックが数段飛ぶっていうけど、これがそれなのかな。

「僕はその人のことを、いつも『先生』と呼んでいた」

遠いどこかを見つめながら、ぼつりと堅書君がつぶやいた。その表情は、なんだか不思議と、高校生くらいの男の子に見えた。

5

「先生って……高校の先生とか？」

意味がわからない。でもなんか、この話はちゃんと聞かなきゃダメな気がする。さっきまでの荒ぶった気持ちが少しずつ落ち着いてくる。

「いや、違う。別に教師だったわけじゃない。だけど、なんていうかな……。『先生』としか呼びようがないんだ。思い出すたびに『先生』と言いたくなる」

「ふうん……？　よくわかんないけど、大切な人だったんだろうなってことはわかるよ」
私は再び玄関先にしゃがみこんで、ヤタのおなかを撫でながら堅書君の話に耳を傾ける。
「うん。僕と彼女を出会わせてくれて、僕にいろいろなことを教えてくれた。だけど先生は、僕の前から消えてしまったんだ。いや、僕が消してしまった。この手で。ずっとそう思い込んでいた。あの時はそうするしかなかったけど、僕にとってはそれがずっと心の重しになっていた」

話がどんどん意味不明になっていくけど、その口調は真剣そのものだ。

「だけど、二回生の時にわかったんだ。先生は消えたわけじゃなかった。どこかにいるんだって。だから僕はもう一度先生に会いたい。もう一度だけでいい。会ってお礼を言いたい。もしかすると僕が生きているうちには無理かもしれないけど、それでも先生のいる世界に手を伸ばしたいんだ」

いつもの寡黙な堅書君とは別人みたいに饒舌で、その静かな熱量にあたしは少し驚いている。

「そっか。なんとなくわかった。堅書君はどうしてもその先生に会いたいんだね。で、それと堅書君の猛勉強とどんな関係があんの？」

「うーん……。どう説明すればいいかな……。僕は、京都歴史記録事業センターの職員に

なりたいたいと思ってる」

「京都、歴史……」

「千古さんの講義を受けてるなら、アルタラセンターがある所と言ったほうが通じるかな」

「あ、講義で聞いた！ 量子記憶装置とか、クロニクル京都とかでしょ」

「そう、それ。歴史記録事業センターの中でも特に量子記憶装置（アタルタラ）の管制を専門に司る部門」

アルタラセンター。確か、京斗大（キョウトダイ）とブルーラ社と京都市だか京都府だかでやっている、産学官の共同事業の母体。量子記憶装置（アタルタラ）っていうでつかい半球の写真は見たことがある。千古先生はそのセンター長を兼務していて、吉田や桂にほとんどいないのも、センターにほぼ住んでるからだと言っていた。

「アルタラセンターってさ、入るのそんなに大変なの？ 普通の就活じゃダメなんだ？」

「研究機関だし、国際事業の一翼でもあるからね。普通は学部卒では入れない。職種にもよるけど、複数の高度技術試験に合格しなければならぬ」

「ほえー。そんなに大変なんだ。千古研のコネがあっても無理なの？」

「千古研に在籍していたというだけで入れるなら僕だってこんなに苦労はしていない。セ

ンターにいる千古研出身者は数人だけだ。しかも千古研で博士号を取っても採用ではたいして重要視されない」

ふう、と一度ため息を吐いてから、堅書君は熱っぽく語り続ける。

「千古研に入ったところで、院生は直接アルタラを触らせてはもらえない。アルタラのビッグデータを間接的に使った研究がせいぜいだ。アカデミックな研究としては興味深いけど、僕が目指すのはそこじゃない。だいたい千古さん自身、桂にいないしね」

「じゃあ、なんで三回生から千古研に入ってたわけ？ 千古研に行っても無駄っていう話に聞こえたけど」

「正確には二回生の終わりから出入りしてた」

「はっや！」

「学部のように基礎知識として、千古研で博士号を取得するのと同等の知見とスキルは持っておきたかったんだ。桂なんかで五年間もモタモタしてられないし。それに、まあ吉田にいるよりは現場の情報も入りやすかったからね」

なあんだ。堅書君が早い段階から桂キャンパスに行ってたのは、桂に骨を埋めるためじゃなくて、逆に桂での院生生活五年間を早回しすることで、桂から早く去るためだったんだ。あれほどストイックな堅書君でさえ桂キャンパスを出たがってたなんて、何か笑っ

ちゃった。

「だから院試受けないんだね。アルタラセンター一本勝負なんだ」

「ああ。僕はこれに賭けてる」

大博打だなあとも思うけど、潔く夢を追いかける姿はちょっとうらやましいなと思った。あたしは、なんとなくまだ就職したくなくて進学希望してるだけだし、修士課程を出た先で自分が何をやりたいのかも見えてない。

「じゃあ、アルタラセンターにその先生がいるってこと？ お礼を言うだけなら、普通に千古先生にでも頼んでみたら会わせてくれたりしないんかな」

「うーん……。今はいない、というべきかな。まあ、アルタラセンター自体は足がかりにすぎない。あと、千古さんに頼んで会えるわけでもないから、千古さんにはこの話は一切していない」

「えっ。千古研の先輩とか、センターの人にも？ ええと、あと何てったつけ、助教の女の人」

「徐シュウさんかな。話してない。千古研やセンターの人達も知らないと思う」

一瞬、ぞくりとした。この人は、あの千古先生の研究のさらに先に行こうとしている。何か、とんでもないことをやってやろうとしている。

なんていうか、もうそれは、あたしなんかが聞いたってきつと理解できるわけないんだろ。うな、って気がした。

堅書君はアルタラセンターに入って、その後なんか頑張って、先生に会う。あたしがわかったのはそれだけだけど、少し満足した。

あ、でも。

この話を知る権利がある人が、まだ他にもいる。堅書君の密かな野望のせいでめっちゃ苦労させられているらしい人が。

「じゃあさ、彼女さんは……？」

背中を汗がつたう。暑さのせいだけじゃない気がする。

「彼女さんは、知ってるの？ 堅書君が何のためにこんなに苦労してるのか」

「ええと……。アルタラセンターに入りたいっていうこと、それまでの数年間、勉強に専念させてほしいということは伝えている。彼女もそれを認めてくれて、僕の好きなようにやらせてくれている。だけど、その目的が先生との再会っていうことは、たぶん知らないと思う」

「そうなんだ……」

じゃあ、ひよつとして、ひよつとすると。

これって、あたしと堅書君しか知らないってことなのかな。

「この話……。彼女さんも知らないのに、あたしなんか聞いてちゃって良かったのかな」

「本当はできるだけ人には言いたくないんだけど、君にはこれだけ世話になっているし、専門の話もできるから、話しておいてもいいかなと思って」

「……ん、そっか」

千古先生も彼女さんも知らない、ささやかな秘密だ。

「ふふ、じゃ、あたしもみんなには黙ってるね」

その時、ヤタが小さく鳴いた。

「そっか、ヤタもだね。この話は、堅書君とあたしとヤタだけの秘密。ヤタ、人に言っちゃだめだかんねー」

ヤタはすりすりとおたしのひざに甘えてくる。甘えるのは子猫の特権だ。

片手でヤタをあやしながらあたしは、このまま堅書君が彼女さんを放置して死に物狂いで勉強を続けてくれていいんだよって思っちゃってるのに気づく。あたしはただこんな風に、ずっとヤタとそれを眺めていられば十分かなって。

だけどそれって、堅書君にとっては幸せなんだろうか、とも思う。

やりたいことがあるのはわかった。それはすごいことだ。でもそのために彼女と会った

も我慢して、毎日不健康な食生活して、一分一秒も惜しんで貴重な大学生活を勉強に捧げるのって、堅書君の人生にとって、いいことなんだろうか。

あたしの中で、二つの矛盾した感情がぐるぐるせめぎあっている。

「でもさ」

少し考えて、あたしはやっと口にした。

「夢があるのはわかったけどさ、堅書君は無理しすぎなんだよ」

本と机とPCしかない殺風景な部屋を見回しながら続ける。

「こんな生活してたらマジ死んじゃうって。勉強も大事けどもうちょっとこう、大学生らしい楽しみとか、生活の彩りとかさ」

「そんな器用なことできないよ。要領が良くないから、一分一秒でも愚直に頑張るしかないんだ」

「堅書君てさ。……わりとDMだよな」

堅書君は少し考え込んだ後、こんなことを言った。

「思ったんだけど、僕の先生も人生の目標のために、ずっと大変な苦勞をしてきたんだ。すべてを切り捨てて、極貧で死に物狂いの生活をした。……もしかすると、先生を追いかけるあまり、知らないうちに僕の生き方もそれに縛られてしまってるのかなって」

さすがに、バカになって思った。ベンキョしすぎて、バカになっちゃったのかなって。だから思わず言っちゃった。

「は？ バカじゃないの!? いくら恩師だって、所詮、他人じゃん」

露骨にむっとする堅書君。他人じゃないんだよって顔をしてる。考えてることが結構そのまんま顔に出るんだよね。うん、まあ、ちよつと言い過ぎたかな。ごめん。

「や、まあ、なんつーかさ、先生は先生の人生、堅書君は堅書君の人生があつてさ、それって別物なわけじゃん」

「……」

「それに先生だってそんなこと堅書君に望んでないと思うよ。どんだけ苦労したかしんないけどさ、教え子にもそれを体験させようなんて、負の連鎖だよ」

「……そうか」

「だから、堅書君が先生に憧れる気持ちはわかるけどさ、それに人生を束縛されちゃダメだよ。そこまで生き急がなくなつて、先生だつてきつと待つてくれるよ」

「うん」

「もつとさ、大学生らしいこともやりなよ。今日みたくダラダラおしゃべりする日があつたっていいじゃん。ヤタのことも堅書君のことも、いつでも力になるからさ」

「そうだな。ありがとう」

「彼女さんともたまには遊びに行ったりしてあげなよ」

調子に乗って、さっきまでは思ってもみなかったことを言ってみたりする。でも今はなんだか素直にそう思えた。

あたしは再び立ち上がった、ヤタを抱えて段ボールにひよいと入れる。ヤタは大人しくタオルの上に丸くなった。

「そんなじゃ、ヤタ、そろそろ獣医さんのところに行こっか。お前のご主人様は今日も留守番して猛勉強だからね」

ヤタを連れていく準備をしていると、堅書君がすっかりカピカピになったお皿を重ねながら、

「今日は本当にありがとう。助かった」なんて殊勝なことを言った。

「ほんつと感謝してよね。これは貸し！ 堅書君がアルタラセンターに入ったら一万倍にして返してもらうってことで！」

こんなに長く堅書君と話したのは初めてのことだった。ヤタが導きの神様つてのは本当なんだなあってほんやりと思った。あたしは堅書君のことをすっかりわかった気になっていた。

ただどあたしは何もわかってなかったんだ。堅書君は一番大事なことをずっと隠していた。あたしがそれを知ったのは、卒業を間近に控えたある冬晴れの日のことだった。

6

ヤタのフードが入ったビニール袋を手にも、今日もあたしは安アパートの冷え切った廊下に足を踏み入れる。

堅書君は、猛勉強の理由を打ち明けてくれて以来、たまに研究室に泊まり込むときヤタの世話をあたしに頼むようになった。あたしが近くに住んで猫の世話も慣れてて堅書君の事情も知ってて、頼みを断れないってわかってるから。だからあたしに洗いざらい話してくれたんだな。ほんつとあいつ策士すぎ。完全にあたし、都合のいい女じゃん。でもまあ、アルタラセンターの最終入所試験の結果も来月にはわかるらしいし、あたしも卒論をやっと出し終えて一息ついたし、何より二月のこんな寒い日にヤタを放っておけなかった。

鍵なんて誰もかけてない不用心なアパートの廊下は静まりかえっていて、底冷えがタイ

ツを通して伝わってくる。つま先だって歩きながら廊下の奥に目をやると、堅書君の部屋あたりから、誰かが出てくるのが見えた。こちらに歩いてこようとしている。

逆光で顔がよく見えないけど、明らかに堅書君ではないことはシルエットでわかった。女性だ。

丈の長いコートに身を包んでいる。ストレートの黒髪の一部を、両サイドで結んでいる。ハーフツインテール。

初対面だけど、あたしには一発でわかった。

堅書君の。

——彼女さんだ。

あたしに気がつくと、軽く会釈してきた。もう逃げられない。あたしは観念するしかなかった。

桂キャンパスの一角にあるカフェテリア。Seieneという、月の名を冠したその食堂で、どういうわけだか、あたしと彼女さんは向き合って座っている。

恋人の部屋から出てきた彼女さんと鉢合わせするなんて、最悪のシチュエーションだっ

た。あたしは堅書君と同じ学科の同期で、卒論関係の配布物を届けに来ただけなんだと必死に弁明した。前半は嘘は言っていないけど、配布物は完全な出任せだ。それなら、と彼女さんが部屋を開けようとしてくれるのを、これは本人に直接渡して説明しないといけないからとかなんとか言って必死に阻止した。ヤタ、マジごめん。あとで出直すから午後までもうちょっとだけ待ってて。

その後は完全にテンパってて、何を話したのか正直覚えてない。ただ、彼女さんは「堅書さんからお話は伺っています。どこかで少しお話できませんか」なんてめちゃくちゃ怖いことを言い出して、それ以来お互いに終始無言でこのカフェテリアまで来てしまった。何。お話は伺っていますって何。怖すぎなんですけど！

緊張しすぎて味がしないチキンカツを噛みしめながら、あたしはあらためて正面にいる彼女さんを見すえる。

完璧な正統派ヒロイン。昔見せてもらった写真ではよくわかんなかったけど、こうして見ると、最低限のメイクなのに目鼻立ちは整っていて、どう見ても美人の部類だ。それに比べたらあたしなんて完全に、どこにでもいるモブの造形。情けないくらいに。

だけどこの彼女さん、何かが普通じゃない。相当な変わり者、という気がする。堅書君がまともに思えてくるくらい変だ。ある意味、お似合いのカップルなのかもしれない。

怒っているわけではなさそうだけど、ずっと黙ってきんぴらごぼうを食べている。何を考
えているのかわからない。

居たたまれなくなつて、あたしから尋ねた。

「あの……話つて……」

「ああ、そういえば自己紹介をしていませんでした。すみません。一行瑠璃いちぎようるりと言います。
一行、二行の一行」

眼光が鋭い。

「いちぎよう……さん」

「総人の四回生です」

知っているとおりの情報。

「あ、はい。あたしはさっきも言つたけど工学部の四回生。同期だし、タメ口で……いつ
かな」

「ええ、かまいません」

かまいませんと言いつつ、自分は合わせない。やっぱ変わつてゐるな。まあ、それなら
こつちもタメ口で行かせてもらうよ。敬語だと、向こうのペースに巻き込まれてしまいそ
うだから、あえて強氣で行く。

「ありがと。よろしく」

「気づいておられると思いますが、堅書さんと……こ、交際、をしている者です」

交際をしている者……ってすごい表現だな。一行さんの耳が少し赤くなったように見えた。

「はあ……それは、どうも」こちらも意味不明な返しをしてしまう。

「それで、話というのは、堅書さんのことについてです」

「ひっ」

キラリと光る刃のような言葉に背筋が思わず伸びる。何だろう。これ以上彼に近づかないでもらえますか、とかかな。あるいは、私達結婚するんです、とか。最悪の想像が無限に湧いてくる。

「貴方はいつも、堅書さんの猫の面倒を見て下さっている、と聞きました」

ヤタのことまでバレてるのか……。ともかく、いろいろと情報を下方修正する。堅書「君」なんて馴れ馴れしく呼んだらきつと殺される。

「あ、ああ、猫ね。そんな、いつもとかじゃなくてごくたまーにだけど、ほら、あたしも桂だし、堅書……さん、時々研究室に泊まったりするからさ、そういうときだけごはんをね。あ、部屋は入ってないよ！ マジで！ 玄関のところでごはんあげてるだけだから、

ね」

「ではお聞きしますが、堅書さんがアルタラセンターのエンジニア職を目指していることはご存じですか」

なんつーか、この人も話が飛ぶねー。

「うん。知ってる。……って、あ、もしかして合格内定したの!？」

「いえ、まだ最終試験の結果は出ていません。ですので、今から話すことは、あくまで堅書さんが合格したと仮定しての話になりますか」

一行さんがこちらをぐいと見据えてくる。

「貴方は、堅書さんがアルタラセンターに入所したあと、何をしようとしているか、どこまでご存じですか」

「え、えっと……」

たしか堅書君は、先生のことは彼女さんに話してないって言ってた。だから、黙って置いてあげたほうがいいんだろうな。あたしと堅書君の秘密だから。

「あー、実はよく知らないんだよね。何かやりたいことはあるみたいだけど」

「……そうですか」

沈黙。え、何この間^ま。怖い。何か怒らせるようなこと言っちゃったかな。怖すぎる。

そのまま一行さんは無言でお茶碗に残ったご飯の最後の一口に箸をつけ、お味噌汁を静かに飲み干した。どうにもペースがつかめなくて戸惑う。お茶を啜って一息ついてから、ようやく再び口を開いた。

「それならなおさら、貴方にも情報を共有しておいたほうがよさそうですね」

あたしは思わず唾を飲み込む。

「堅書さんは気を遣って黙ってくれていたようなのですが、私は堅書さんが何をしようとしているのか、私なりに調べました。たぶん真相に近いところまでたどりつけたと思っています」

怖っ……。理解のある彼女さんかと思ってたけど、泳がせという陰で全部把握してるってか。これ、絶対隠し事できないやつじゃん。いやあ、堅書君も大変な人を彼女にしちゃったもんだね。

この様子じゃ、先生に会いたいってこともきつとバレてそうだな。

「堅書さんは、おそろく」

一瞬言葉は切ってから、一行さんは続けた。その言葉は、あたしの想像を遥かに超えていた。

「別の世界に行こうとしています」

「え？ 何？ 別の……世界？」

話が特大のジャンプを見せてあたしは完全に振り落とされている。もしかしてスピリチュアルとかそっちの人なのだろうか。

「別の宇宙、といったほうが正確でしょうか。信じてもらえないとしても無理はありません。私自身、そんなことが本当にできるのか、信じ切れていません」

「……」

違うよ、堅書君はただ先生に会いたけななんだよ、と思わず言いたくなったけど、そういうえば「先生のいる世界に行きたい」と言っていたような気もする。何かの比喩だろうと思ってたけど、百歩譲って先生が本当にどこか別の「世界」にいると思ひ込んで、そこに行こうとしているんだとしたら。

——頭おかしい。やっぱり堅書君は完全に頭おかしい。もはやバカとか変人とかそういう次元じゃない。人としてヤバイ領域に突入してる。

「そしてこれは堅書さん自身も気づいていないのですが、ただひとつ、はつきりしていることがあります」

どう対応すればよいか絶句しているあたしに、一行さんはさらに言葉を重ねた。

「結論から言います。医学的には……堅書さんがこの計画を実行すると、高確率で脳死状

態のままになると予想されます」

その言葉の意味は、すぐには理解できなかった。ただ、何かを思い詰めたような彼女の顔つきはどこか狂気じみていて、いつも堅書君が見せる表情に少し似てるな、と思った。

7

「いや、ちょっと話飛びすぎ……別の世界とか、脳死とか、いきなりそんなこと言われてもさ」

何もかも胡散臭いしヤバさしか感じないけど、なんとなく全否定しちゃいけない気はした。

もし堅書君が本当におかしくなってるとしても、その背景や根拠はちゃんと知っておきたかった。

それに——もしも堅書君がただの妄想に取り憑かれていただけだったとしたら、彼の今までの頑張りとは完全に無駄になってしまう。それはあまりにむごい。たとえばほんの一握りでもそこに真実があつて、堅書君は確かにこの世界の本質に近づきつつあったんだ、と心

のどこかで思いたかった。頭では否定しつつも、この荒唐無稽なほら話に一縷の望みを賭けたいと思ってしまう自分がいた。

「まずはちゃんと順を追って話をしてよ。ちゃんと聞くからさ」

もう冷めてしまったお茶を一口飲んで、あたしはぴんと背筋をただして一行さんの目を見る。何かを訴えたいのだということは伝わってきた。ごめんヤタ、あと一時間だけ待ってて。

「そうですね。私自身まだ十分に理解が追いついていませんし、長い話になりますが……中途半端はいけません。やってやりましょう」

あたしはうなずく。

「まず……この宇宙がどうやって開闢したか、についてはご存じですか」

「えーっと……ビッグバンだっけ？ 宇宙論の講義でざっと習った」

「はい。初期宇宙の微小な量子ゆらぎが指数関数的にインフレーションを経ることで現在の宇宙が形作られたという説が有力です。ビッグバン仮説からは、因果律的に関わりを持たない——つまり観測できない別の宇宙がこの宇宙の外に存在するだろうと予言されていますね」

「うん、^{マルチバース}多元宇宙ってやつだよ。宇宙が無数にあるっていう。さっき言ってた別の世

界って、もしかしてこれ？」

「はい、私はそう解釈しています。ただ、多元宇宙はあくまでインフレーション理論から予言される仮説にすぎず、決して実証することはできません。私達の宇宙から他の宇宙を絶対に観測できないからです」

「まあ、そうなるね」

「つまり極端に言うと、ただのお話に等しいわけです。物理学の範疇の外でしか語ることができない」

「はあ」

ん？ 別の宇宙はただのお話だと言いつつた？

「ここで、少し私の専門の話をさせてください。こういう物理学の外側を扱う学問が、今の私の研究テーマです。形而上学、メタフィジックスの一分野です。特にナラティブな視点から多元宇宙を記述しようと試みています」

「ナラティブ……？」

「さっき、ただのお話と言いましたが、お話、物語というのは、事象を主観的に記述したものです。事象を客観的に記述する物理学とは対極にあります。つまり、お話の世界にすぎないこの宇宙の外側には客観的な時空間はもはや存在せず、主観的時間と主観的空間の

みが定義されます」

「……? ? ?」

「逆に言えば、主観的な時空間としてであれば別の宇宙を記述できる可能性があるわけです。これが、私が今研究している^{ナラティブコスモロジー}物語論的宇宙論をうんと大雑把に説明したものです。というよりむしろ、時間も空間も本来の形はすべて主観的な物語なのであって、私達の宇宙では客観的なものとして見えているに過ぎ——」

「ちょ、待って待って、ストップ! ……ごめん、ちよつと全然わかんない」

ひとまず話をさえぎる。物理の話であればまだギリギリついていけたけど、物語がどうかというあたりで完全に脱落した。

「すみません。確かにこのあたりの話は本題ではありませんでした。ともかく、この宇宙の外ではあらゆる事象は主観でしか記述できないということだけ覚えてください」

「まだ全然わかんないけど……とりあえずわかった、ことにする。続けて」

「はい、まとめますと、この宇宙から別の宇宙に行きたい場合、物理的には不可能であってもナラティブなアクセスであれば可能なのではないか、と私は考えています。つまり、物理的身体ではなく量子精神によるアクセス、です」

「量子精神……あ!」

その単語をあたしは千古先生の講義で聞いた覚えがあった。確か、器と中身、という言い方をしていた。量子記録データを利用して、脳に損傷を負ったネズミが目を覚まして動き出す動画を見たような気がする。

「そっか、えっと、アルタラがあれば、別の宇宙に行ける……ってこと？」

「はい、量子記録技術については、専門が近い貴方のほうが私よりよほど詳しいですね。厳密にはアルタラそのものを利用するというよりは、その基盤となっている量子記録技術と物語論的宇宙論の考え方を組み合わせて実現しようと考えているようです」

まだにわかには信じられない話だけど、堅書君がアルタラセンターにこだわる理由、特に直接アルタラを操作できるエンジニア職を頑なに目指している理由が少しわかった気がした。いつだったか、堅書君が千古先生のさらに先を見ているような気がして空恐ろしくなったけど、あの直感は正しかったのかも知れない。

「なるほどねえ……それでアルタラセンターだったんだ。まあ、ほんとに別の宇宙に行けるかどうかはおいといて」

「ええ。量子精神でアクセスできるかもしれないというのもあくまで仮説であって、断言はできません。個人的には、眉唾とは思っていませんが、五分五分ではないかと」

あたしがなんとか話に追いついたので、一行さんも少しほっとしたみたいだ。千古先生

の講義を取つといて良かった。それに、一行さんが仮説を盲信せずに五分五分と言い切った態度にも好感が持てた。きっとよい研究者になるだろうな。

「で、……脳死つてのは。もしかして、それって」

正直言うと、ネズミの動画を思い出した時点で、ちよつと嫌な予感はしていた。

「ええ、貴方の想像しているとおりです」

「……」

「量子精神を物理脳神経から切り離す必要がある、ということですよ」

ネズミの動画では、脳死状態のネズミの脳神経を量子精神で修復して、ネズミを生き返らせていた。

ええと、今回は、その逆、ってことだよな。

つまり、量子精神を物理脳神経から切り離したら、元のネズミと同じ状態になるってこと。動画の中でぐったりと脱力していたネズミを思い出した。

吐き気がした。

「……待って、あのさ、堅書……さんはさ、それに気づいてないの？ 自分が——脳死状態になるってことに」

堅書君だってあの動画見てたよね？ だったら気づくはずだよな？ あたしでもわかる

のに、堅書君がそれを見落とすなんてありえない。

「本人に直接訊いたわけではないのですが、おそらく堅書さんは、そこまでは気づいています」

「じゃあ、なんで？ まさか死ぬ気だっというの？ そんなわけないよね？ そこまでバカじゃないよね？」

「もう少し説明させてください。堅書さんはおそらく、切り離れた量子精神を再び物理脳神経に作用させれば、また元の状態に戻れると考えています」

「……あ、そうか。そりゃそうだよね」

うん。確かに、ネズミが生き返ったんだから、一度切り離れた量子精神を戻せばまた生き返るはず。

またよくわかんなくなってきたな。

「じゃあ大丈夫ってこと？ それとも、元に戻るのがすごく難しいの？」

一行さんは言葉を選びながら説明する。

「さきほど、この宇宙と別の宇宙は因果律的に関わりを持たないと言いましたよね」

「うん」

「堅書さんが別の宇宙に行って戻ってくるとした場合、別の宇宙で何かを体験して、その

経験を携えて戻ってくるようになりますよね」

「だね」

「これはつまり、因果律的に関わりを持つてしまうということになり、定義と矛盾します。よって不可能です」

「え……？」

「数学的には、ナラティブ時空間での量子精神の振る舞いは古典的な二体問題で近似できます。つまり、軌道——という言い方が適切かわかりませんが、別の宇宙にアクセスする際の軌跡は二次曲線、アクセスの瞬間の状態量はその交点で表されます。ですが、計算上、どうしてもその離心率 e が1を超えてしまう。双曲線になってしまうのです」

ああもう、また一人で爆走してる。でも、何かすごく大事なことを言っているような気がする。ね、もう少し落ち着いて。あたしもがんばって聞くから。

「えっと、もう少し少しかみ砕いてもらえないかな」

すると一行さんは手元にあった紙ナプキンにボールペンで何やら描き始めた。

「二次曲線は、離心率によってそのかたちが変わりますよね。 e が1より小さいと楕円、 $e=1$ で放物線、1を超えると双曲線」

「あー、うん」

説明しながら一行さんは楕円、放物線、双曲線の図を次々に描いていく。受験で散々やったつけ。楕円も放物線も双曲線も、実は共通の式で表せて、離心率っていうパラメータの値が違っただけなんだっていうやつ。見た目が全然違うのに実は同じものなんだって知ったときはちよつと面白かったな。

「軌道が楕円であれば、ぐるっと一周してまた元のところに戻ってくる。これは、別の宇宙に行つてまた戻ってくることに相当します」

手書きの楕円に沿つて、ボールペンの先が大きく空中で円を描く。

「ですが、放物線、双曲線の場合、ぐるっと一周ということができません。永遠に元の点にはたどりつきません。漸近線に沿つて無限遠方に飛び去るしかない。太陽系外天体の描く軌道と同じで、要は、片道切符なんです」

「ああ……」

「楕円になる、つまり $e \neq 1$ となるような解がないか探してみたのですが、ナラティブ時空間上ではどうしても解がないのです。理論的にも、解析的にも」

紙ナプキンの双曲線の弓なりのカーブを指でたどつてみる。その曲線は無限の彼方からやつてきて、また無限の彼方に続いていく。二度と元の場所には戻らない。そういうことだ。

「細かいところはぶっちゃけわかってないけど、戻ってこれないということはわかったよ。うん。一行さんが何を心配しているかはわかった」

「ありがとうございます」

「あ、だけどさ、片道切符だったとしても、やっぱり因果は運ばれてしまうんじゃない？この世界での記憶とか経験とかを持って別の世界に行ったら、因果律的には関係してるってことにならない？」

図のおかげでだいぶ理解が進んだ気がする。

「さすがですね。そのとおり、片道であつても因果は伝搬しません。つまり、この世界における記録は一切保存されず、完全に向こうの世界における存在になつてしまふと思われ

ます」
「それって……こっちの世界での記憶だとか経験だとか、そういったものが消えちゃうってこと!? 全部忘れちゃうの？」

「はい、仮に別の世界にたどりついたとしても、その時点でこちらの世界の情報は一切リセットされたかたちになって、自分がまさか別の世界から来たとは想像すらしないでしょう。向こうの世界でどうなるかをこちらから知ることは一切できないので、これも永遠に仮説の域を出ません」

「堅書さんはさ、このへんのことは、全然気づいてないってことなんだね」

「はい。堅書さんの計画を多角的に推測する限り、ナラティブ宇宙論と因果については考慮していいみたいです。こちらの因果を向こうに持って行けて、そのまま戻ってこられる、という仮定を置いてるように見えます」

「そっか。ちよつとした周遊旅行くらいに考えてるのかな。……最悪だね」

別の宇宙がどうか離心率がどうかは正直まだ怪しい気がするけど、あのネズミの動画を見てたから、脳死についてはなんか腑に落ちた。だいたい曲線がどうか以前に、一度脳死になってしまった人を再び蘇らせるのは常識的に考えてもかなり大変に思えたし、ネズミの実験だって成功率100パーセントってわけじゃないんだろう。そう考えると、やっぱり堅書君のやろうとしていることは自殺行為に思えた。

それでもし堅書君が本当に別の宇宙にたどり着けたとしても、この世界での出来事をすべて忘れてしまうっていうのは耐えられなかった。ヤタのこととか、千古研であんなに頑張ったこととか、あたしと交わしたちよつとした会話とか、そういうの全部忘れちゃって、なかったことにして向こうの世界で生きていくとしたら、ひどすぎると思った。

堅書君を、なんとしても止めなきゃいけない。絶対に。

もちろん、堅書君はこれまでの夢が絶たれてしまつて、きつとすぐぐがっかりすると思

う。それはすごく心苦しい。だけど、脳死になって周りの人達を悲しませてまで叶えるべきことじゃない。それに堅書君自身がそっちの世界に行ってもその目的を覚えていないんだったら、何の意味もない。先生に会ったって何もわかんないじゃん。こんな悲しいことってないじゃん。だから、何か別のかたちで堅書君の夢を叶えようよ。

「一行さん」

「はい」

「ありがとね」

「え？」

一行さんはきょとんとしている。

「教えてくれて」

あたしは心底、一行さんに感謝していた。緊張も消えて、すっかり最強の仲間を見つけた気分になっていた。

「ね、一行さんさ、一緒にこの計画を止めよう。堅書さんには悪いけど、一行さんからも説得すればきつとわかってもらえるって」

「……え？」

「絶対堅書さんを脳死になんかさせない。アルタラセンターに入るのは別にいいとしても、

このまま実行したら何が起こるのか、全部ちゃんと説明しようよ」

一行さんは、違うんです、という顔をした。

「……すみません、うまく伝わりませんでしたね。そういうことを言いたかったのではありませんでした」

「は？」

「私は、堅書さんを止めようとは思っていません」

「……今、なんて？」

ようやく、あたしは理解した。一行さんが、堅書君の何万倍も、狂ってるってことを。

「私も堅書さんと一緒に行くつもりです」

8

「一行さんはさ、それでいいわけ？ 堅書君が不幸になっていくのを黙ってみてるの？」

「堅書君は先生に会えるかもしれないけどさ、そんなの自殺行為だよ。全員置いていこうとしてんじゃない。一行さんだって、もう会えなくなっちゃうんだよ？　好きな人がバカやろうとしてたら、それを全力で止めるのが彼女の役割なんじゃないの？　……あたしだったら絶対止める。堅書君が好きなら、堅書君に幸せになってほしいって思うもん。そんなんで堅書さんの彼女やってる資格あんの！？　それでも彼女なの！？」（言い過ぎ）

「堅書さんは、私が絶対に不幸にさせません」

一行さんが、なんか切り札出す。センターの別の職種で二次試験まで通ってるとか、一行さんも片道切符を取り出すとか。ダイブベストとか。

「バカじゃないの！？　何二人で不幸まっしぐらしてんの！？　ご家族とか、学科のみんな

なとか、ヤタとか、あたしとかさ……残される人達の気持ちも考えてよ！」

「僕は不幸にはならないよ。幸せになれって言われたんだ。だから不幸にはならない。絶
対に」

「あたしはただのモブで」

「違う。君が、君とヤタが、僕の先生を助けてくれた。だからもう一度だけ、僕ら二人を
助けてほしいんだ」

「君の言う通り僕はバカだ。一行さんもバカだ。二人揃って大バカだ。僕も彼女もやってやろうと決めたら周りの声なんて耳に入らなくなってしまう」「もう一度だけ冒険に出たいと思ってる。今行かないときつと一生後悔すると思う。だけど冒険譚には帰る場所が必要なんだ。僕はこの世界が好きだ。僕はこの世界に戻ってきて、ここで一行さんと幸せになりたい」

「ねえ、最後にさ、もし先生の写真あったら見せてよ。堅書君がそこまでして会いたい人がどんな人なのか、見てみたいんだ」

「ないんだ」

「え？」

「写真の一枚すらない」

「忘れ物を届けに行くんだ」